

1951^P-1/4

1951^P-1/2 未分
1956^P 259

花の宴

倭国の洛陽城の前面には、浅瀬ながら

かなりな幅の洛水（堀川）の流が有り

鮮やかに彩色された優雅な橋が

水面に美しい影を落していた。

■ 難升米は、その橋を指差しながら

「我が国の都城の南正面に掛け渡される

古来の伝統的な橋と全く同じ作りの二

上の橋に致しました

と説明し、さらにつけ加えて、

「怪訝にお思いでしょうが、私達は、この

橋を「貴国の浮橋になぞらえて、二

上の天浮橋と呼んでおります」

と言った。

・なるほど、その橋の風情は、どう見ても洛

陽の都の浮橋を髣髴とさせるものではな

かった。

・ 梯儂は、微笑みながら、洛水にかかっている

記(原)91
記(原)原文238

1.951^{p-2}/4

うき橋内堀内 和歌をから下にない。
2026^{p-4} 万4-263^p

紀上140^p

る日、二上の天浮橋の様に見入った。
又なお、神代紀下第九段本文に、日二上の天
浮橋と記さ小ている。
堀江(堀川)の河床には、玉石がぎっしり
敷き詰められており、すいすいと泳ぐ小魚が
時折、銀鱗をきらめかせて跳ねた。
木万巻十八ー四〇五六に、堀江には玉敷か
まーちーとある。
浮橋の向こうに目をやると、外郭城の正門
(羅城門)が、高く聳えていた。
難升米に導かれるまま、下
川の中程のところに、
あり、この浮島の手前と、その奥との一直線上に
取り掛けられた二つの日浮橋、ハ半円形の太
鼓橋、さー、一つ、また一つと、越えて
ゆくのだった。
* 神代記、天孫降臨条に、
「天の浮橋の浮島に、りゅうとお立ちにな
つて、云々」

神代紀 457

1,951^P-3/4
紀上140^P, 569^P

紀上140^P 545^P

とある。

また、神代紀下第九段本文に、

「浮者在平處に立たして、云々」

とある。

※つまり察するところ

へ倭人達は、都城の前面に二つの口半円形

の橋を一直線状に連らね、この二上の

橋を、洛陽城前面の口浮橋に因んで二上

の天浮橋と呼びならぬのだらう✓

と想察される。(第16図参照)

※流れかゆるやか過ぎるので船(筏)を多数並らべて浮橋とする

■外郭城壁の南正門(いわゆる羅城門)から

北方、遙か彼方を望むと、口宮城(大城)

の城壁南面が、左右に延延と伸びていた。

洛陽の宮城と同じように、邪馬台国の宮城

の南端にも、四つの宮城門があった。

そして、最も美しい宮城門の向こうには

大小様々な宮殿が、建築の最中ながら

幾つも見えかくれていた。

*

のを諦めたのかも知れない。

「さいちゅう」といふ
右頁4行途中

次原から

1951^P 4/4

「梯儀殿、こちらの方（ほう）でございます。何分（なんぶん）
にもこのように建設（けんせつ）途中ですので、~~要（よう）~~が
どうか足（あし）もとにお氣（き）を付け（つけ）になつて下さ
い。難（なん）升（しやう）米（まい）は「外郭（がいこく）城（じやう）正（せい）門（もん）（羅（ら）城（じやう）門（もん））の（まへ）に
立つ梯（てい）儀（ぎ）等（とう）を「――――」と東（ひがし）側（がわ）の
道（みち）へと先（せん）導（どう）していった。

急ぎで357

堀川あなから、
白川を見ることが
出来た

1916-2/6 ⑤
えびさき ⑤ 1917-4/4 ⑥ 浮き「心浮き豆」 ⑤ 1916
1952 P 新Q-76 97 ⑤ 1945

前頁

かしその道路は今日の花の宴のために特
に作られた立派な大道であり、一面に玉砂利
が敷かれていて、輿へ揺られてゆくほどに心
が浮き浮きしてくるのだった。
どこまでも真直ぐ延びる外郭城の木柵
の南側に沿って道は続き、やがて薄紅色の群
山あよび飯高山のあたりへと到った。
輿の左手に群山、右手に飯高山があつた。
群山は外郭城内の山であり、飯高山は外郭
城外の山である。
飯高山の南側の裾を流れる堀川(洛水
に相当する川)の向うは、かなり急勾配の
下り傾斜になつて、谷底を西流する川が
白川(伊水に相当する川)である。
そして、白川の南に広がるタクマガ原のな
だらかな台地の上に、あの香山(高山)の二
上の山が、あたかも一つの山であるかよう
に重なって見えていた。
ここに梯儼の乗った輿は、木の柵に設けら
れた急ごしらえの出入口をくぐり、ゆるゆる
と群山の花の道へと入っていった。

別

白檀 紀 292P
① 1961P 1969P

白檀 由 1978P 118P, 1961P 1/2
1953P 1/2
おね 尾根 35P

あひ 清 1182P
まき 嬉々 2516P
はな 華やか 1811P
1951P 1/2 快

さな池は、

鮮桃色に染つた鏡

その咲き乱れる桃また桃の花の咲きほこつており
池の向う岸には桃の花が咲きほこつており
「何と美しい水、何と震ゆい池だろう」
群山の西の麓の小さな池へと流水注いでいた
清流は、風に舞つてきた桃の花びらを浮かべ
出すように、澄んだ水が湧き出ていた
いたるところから、さきに山肌から染み
白檀の木々の根元の大地にちめん、あちこち
奥を降りてあたりを見廻すと、高く聳つた
るばかりにヒンヤリしていた。
根に抱きかえられたような凹所となつてい
て、様相は一変し、キユツと身体が引き締ま
けかけられるのも、何となく清々しい。
こうして間もなく、孤立丘の群山（一四五
心）の西麓に到った。そこは、南北二つの尾
根に抱きかえられたような凹所となつてい
るばかりにヒンヤリしていた。
奥を降りてあたりを見廻すと、高く聳つた
白檀の木々の根元の大地にちめん、あちこち
いたるところから、さきに山肌から染み
出すように、澄んだ水が湧き出ていた
清流は、風に舞つてきた桃の花びらを浮かべ
群山の西の麓の小さな池へと流水注いでいた
「何と美しい水、何と震ゆい池だろう」
池の向う岸には桃の花が咲きほこつており
その咲き乱れる桃また桃の花の咲きほこつており

ひかり 人 1880P
全70人

・カラー
・右頁の上半分に
掲載。

1,953^P 3/2



1369

はな

と

なかのまき

『花と撮る』中野正皓

1469

写真図版 342 ^も桃の花

主婦と生活社 1999年発行 17頁参照

1.954^P - 1/2

・カー
・左頁の上半分に
掲載。



146G

写真図版 343 満開の桃の花

136G

120G
『万葉集入門』 別冊太陽 日本のこと 180 平凡社 2011年4月25日発行 118頁参照。
桃は、古来、邪気を払う力があるとされ、親しまれた。淡い紅色、濃紅色、白色などの花を咲かせて、
美麗である。

①1968 栄隆 昭和 名譽
木37 栄隆礼国の家客と迎える礼

「光榮、卑臨降と
梯衝の援援にある

1954 P. 2/2 彌彌 1908, 2058

木37 栄隆礼国の家客と迎える礼

のようになさえ見えた。
まったく、この世のものとも思えない程の
美しいながめであつた。
＊なお、数十年前の春にこの池を訪れた時に
一軒だけポツンとある
農家の庭に桃の花が満開だった。―――今
も春になつたら咲き続けてゐるのだらうか。
とその時、なかなかの品位をもつて、丁重
に会釈した者があつた。
「これはこれは梯衝殿。私は、設馬国（投
馬国）の長官・彌彌と申す者です。この花の
宴が終つたら、私の国へおいでいただけると
伺い、光榮に存じております。である貴方様
副官・彌彌那利は、娘赤女殿の御夫君の来
訪を大変喜び、心樂しみにしてお待ち申し上
げております」

＊

かんじん 456
 349
 1955
 1953

席には、大^{たい}夫^ふを^をは^はめ^めと^とす^する^る朝^あ廷^{てい}の^の重^{じゅう}臣^{しん}達^だ
 が^が整^{せい}然^{ぜん}と^と座^ざを^を占^{せん}め^めて^てい^いた^た。
 主^{しゅ}賓^{ひん}で^であ^ある^る梯^{てい}儼^{げん}が^が、^{ひと}と^とき^きゆ^ゆ見^み事^{ごと}に^に咲^さいて^い
 る^る桃^{もも}の^の花^{はな}の^の脇^{わき}の^の定^{さだ}め^めの^の位^い置^ちに^に坐^{すわ}り^り下^{くだ}
 へ^へに^に宴^{えん}は^は始^{はじ}ま^まつ^つた^た。
 彩^{さい}を^を添^そえ^える^るう^う若^わい^い数^{あま}多^その^の女^め子^こ達^だが^が、^{あで}艶^{えん}や^やか^かに^に着^き
 飾^{かざ}つ^つて^て花^{はな}見^み酒^{さけ}の^の酌^{しやく}を^を一^{いっ}た^た。
 花^{はな}が^が咲^さき^き競^{きやう}つ^つて^てい^いる^るか^かめ^めよ^よう^うな^な華^{はな}や^やか^かさ^さで^であ^あ
 った。
 太^{たい}陽^{よう}は^は、と^とく^くに^に真^ま南^{なん}を^を通^{とお}り^り過^すぎ^ぎて^てお^おり^り、^いま^ま
 天^{てん}の^の中^{ちゅう}天^{てん}へ^へ、^{たか}高^{たか}々^々と^と昇^{のぼ}り^りつ^つめ^めよ^よう^うと^とい^いて^てい^い
 た。
 そ^それ^れは^は、^こ現^{げん}在^{ざい}の^の午^ご後^ご二^に時^じ頃^{ころ}の^のこ^こと^とで^であ^あつ^つ
 た^た。
 う^うか^か。(第^{だい}二^に十^{じゅう}六^{ろく}章^{しょう}八^{はち}日^{にち}の^の起^き点^{てん})の^の項^{こう}参^{さん}照^{しょう})
 と、^{その}時^{とき}、^しブ^ぶル^るづ^づと、^{この}花^{はな}の^の山^{さん}に^に先^{さき}
 を^を踏^ふみ^み入^いれ^れて^て来^きる^る手^て輿^ごが^があ^あつ^つた。
 楽^{がく}の^の音^{おと}に^に乗^のつ^つて、^坂道^{みち}を^を一^{いっ}歩^ぽ、^一歩^ぽと^と昇^{のぼ}つ^つ
 て^て来^きる^る輿^ごは^は、^{ひと}と^とき^きゆ^ゆ煌^{きやう}び^びや^やか^かに^に輝^{かが}いて^いた。
 そ^そう^うして、^手輿^ごの^の飾^{かざ}り^りと^とい^いて^て取^と付^けけ^けら^られ^れて^てい^い
 る^る可^か憐^{れん}な^な桃^{もも}花^{はな}の^の枝^{えだ}が^が、^か軽^{かろ}やか^かに、^ゆ揺^ゆら^らぎ^ぎな^なが^が

1.956^P 山崎 472^P 鄭重 157^P 宝興 2025^P 美事 2109^P 花飾 1963^P 天子の乗物 2109^P

ら近づいてきた。
美事なつくりの豪華な輿。それは
倭国の女王日御子の乗った鳳輦（天子の乗物）
の美称であつた。
人々は恐懼し、皆、いちように最大の敬意
を表わして、その宝輿の到着を待った。
桃園の宴席の中央を通つてやつてきた桃の
花飾りのついた手輿は、梯儼の座の前で止り
そつと降ろされた。
それからややあつて、鄭重に、威厳をまっ
て、その輿の御簾が巻き上げられて開いた。
つき従つてきた豎子の一人が、胸に抱き
あていた履物を鳳輦の前に揃えて置き、い
ぶん年長の女の子が、御輿の内なる人に向つて
そつと手を差し伸べた。

*

与林楚

清らかに美しく
立ち

お名 2279 くら 寛 635 まいにち 2063 毎日 日ごと、ひび

まけつ 565 喜び 至極 みぢかき 2110 身 新 2110 つかいて 喜びと 「こんなにも」 この頁末尾

1958 P

い、この宴を用意いたしました。どうか、こ
ゆるりとお過ごし下さい。
梯馬にとって、―――日 卑彌呼は、
まではただ単に仰ぎ見るだけの遙かに遠い存
在でしかなかった。到底近づき難い、雲の上
の天子なのであった。
ところか何と、茫漠とした謎に包まれてい
るその不思議な女王曰 卑彌呼が、何と今日、こ
の春の日の宴において、―――これ程まで身近かに
まさに手を取らんばかりに飲俵としてくわいてい
るのである。
梯馬は、身も心も置きどころのないくらい
感動し、また大いなる喜びを感じた。
そして震―――い倭国の女王曰 卑彌呼は、
して、心あたたまるような近親感を覚えるの
だった。
「倭国にやつてきて以来の長い月日を、毎
日、楽しい思いで過してまいりましたか、こ
の佳き日の新しい都での花の宴もまた、こん
なにも華麗極まりなくて、存分は必要―――寛

心地好く愉快に

128P 薄然と17 1961P-1/2

うる 元 219°

1.959P

なかえ 元 1644

きぬがさ 5x2P 5L-147P
地輪カーダウス 35P

か、せていた。ただ、おります。し
梯、儂の言葉に、日御子はにっこりと微笑ん
だ。
間近かに仰ぐ日御子の御姿は、まきで桃の
花の化身かと思われ、ばかりにたをやかで、
なまめかしく、そーて言いようもなく美しか
った。
いま、天の中天にある太陽が、燦然とした光
を放っていた。
そんなとき、卑彌呼の頭上に、そつと蓋
がさしかけられた。
蓋は、貴人の後方からさしかけられ、円形
または方形の、絹を張った長柄の傘のことである。
軽やかな蓋の内に、差し込む柔らかな春の光
に、日御子の黒髪が、しとりと、淫んで見えた。
そーて、両肩から胸にいたる微妙な陰影が、
流れるような豊かさを際だたせていた。
倭の女王日御子は、宴席に居並ぶ廷臣達の
方を、ゆつくり、なかめ、渡して、――やあ
ら口を開いた。
「皆の者、聞くか、よし、ハナハナ、神々の
凜と澄んだ声か、群れ集うハナハナ、神々の

萬葉集(一)日本書紀、岩波書店、二巻、巻の序

九州 小林 36° 55' 19" N 138° 22' 28" E 地名 宇土連 228° 19' 64" 1/2 緯度 1.960°

紀上 189°

かんたく 小林 390° 思沢 めぐみ、あかけ 紀上 212°

上に流れた。
むかし、私たちの先祖は、東征の途にの
ぼって、この豊葦原瑞穂国に降臨されたので
した。善政を重ね、人心の掌握に務
められたため、やがて思沢も行き届くに至り
ました。その年月が経過し、まじり然るが故に今
わたしたちも、祖先の偉業のあとをうけ、万
世の後までもこの国が繁栄するように、基礎固
めをなすなければならぬ。とこそ思われま
す。

ひのみこ
日御子はさらに続け
この豊葦原の瑞穂国は、四周を青山がめ
ぐっており、大業をひらきのべ、天下を治め
るのに、まことに好都合な、良い所です。
東に阿蘇の外輪山、北に山鹿の山々、西に
能ノ岳や雲仙岳や宇土の連山、南に九州山脈の
高峯が聳えていて、合志原の四周を、
青山がめぐって、いい得よう。

そこで私は、この九州（一、全土）の

魏志倭 64 年

先祖

うりふた 瓜ニつ 元216
 あや 怪しい 元65
 不史 元1958
 どうとう 元1575
 元1573
 元1959
 元2333
 元1900
 元196
 元212

中への地というべきに合志原に都を置き、
 ハ紘を掩つて字とし、倭国の国土のす
 みずみにまでも、あまねく慈愛の徳政を及ぼ
 した。いものと考えられています。
 日御子の強い決意を見てとて、廷臣達は大
 きくうなずいた。桃の花びらが、二つ三つ、
 ひらひらと舞いおりていった。
 周公旦、私達倭人が尊敬する希代の名臣
 が、この合志原に忽然として現出することにな
 るのです。青山を四周にめぐらせた洛陽の地と同じく
 青山を四周にめぐらせたこの地に、——壮大な洛陽
 と同様の帝都を置いて、日周の時代の我々が祖先達
 徳治の精神をひらめくようではありませんか
 子。滔滔と響き渡る。思ひの魅惑に満ちた日御
 子の声に、人々は身じろぎもせず、陶然とし
 て脚き入った。
 我々が心の内に長らく望んでいた新しい
 時代が、いま開かれようとしてゐるのだ。
 朝臣達は、誰もがそう思った。
 周々に築かれた日名都洛陽城と全く瓜二
 の時代

まこと 真 2073^P

たが 宴 261^P

おまは 玄^P
面映ゆい 329^P
まはゆいおと思われ
るに

1,961^P 2/2

喜びと 673^P
(慶事) 1957^P

白檀 元(西)169^P
紀上 292^P
1953^P, 1964^P 1/2, 3/2, 1969^P

(こ)

つのでを倭国に造営するといふことは、
そんなにもでも、倭人達の心を引きつけ、魅
了せぬに~~お~~おかなかつた。
白檀の枝をとりつけた冠をかぶり、桃の花
の下にすうりと居並らぶ者達の上に、
ひとときゆ華やいだ、こぼれんばかりの微笑みを
注いだ日御子は、更に言葉を継いでこう言っ
た。
「ところで、我々の洛陽城の建設の時に当
つて、この新城の一隅に、洛陽の貴公子・梯
俣様を御招待してゐるといふこんなにも麗し
い喜びごとは、何かしら故あつての事とのよ
うに思われます。
梯俣は、面映ゆそうであつた。
「このううらかな春の日に集う者達よ。今
日は花の宴。梯俣様と共にあつて大いに遊び
樂しむがよい。一面に咲く桃の花は今日のこ
の日を祝つてゐるかのようです。匂い立ち、
この杜麗な新しい都曰洛陽城は眼下に広が
つてはてしもなく、そして盛んなる若気は倭
国中に満ち溢れていて、実に、頼もしいばかり
です。」

(こ)

「ひらひら」と舞い散る
次頁 2行

うけたる 188P 紅 盛人 新味

1,962P

「まこと」 1960°/4行 1964°/2末行

いやお 153P
珍館に 艶やか 47P

さあ、この花の宴が梯鳥様にとつても私達
にとつても良き思ひ出となるように、存分に
乗し一時を過そうではありませんか
こうして、女王が自ら賓客をもてなす宴饗
は、いや増しに華やいでいった。優雅な笛や
琴の音が流れ、艶やかな衣裳を身にまとった
女達の舞いや心を浮き立たせるような軽妙な
男達の踊りなどひきもきらず、さらに飲めや
歌えと、乗しは際限もなく、まさに沸き立
つばかりであった。

さあさ、もう一献おつぎいたしましよ、
う

邪馬台国の日路陽城の外郭城南門近くに
人もりと盛り上った群山は、ほんのり顔
あからめた人々で埋まり、――そいて、薄
紅色の豪華な桃の花によつて彩られたこの花
の宴は、まづ左ぐ、いつ果てるとも知れず、
えんえんと続いていった。

微風に舞い散る、のちめんの花吹雪。そい
はもう、幻の世界であった。

前頁 16行
いちめん
一面

おうか
謳歌 264

1876
正賓 1086 (正容)
正容 1965

1.963

おうか
謳歌 1963
「豪奢」
1956 漢詩 195
清胡 小林 577

れていた。

木

「各陽城東に咲き乱れる桃の花。今や散
りはじめ、ひらひらと風にまかせ何処へと
もなく飛んでゆく。公子王孫達は、咲きにお
う花の下に、散りゆく花びらを身に受けつつ
清朗とした声で歌をうたい、巧みな手ぶりで
舞をまっつて、この世の春を楽しむ。」「代
悲 白頭翁 上 初唐、劉希夷」
この神仙の国の盛大な宴席の正賓としてこ
の豪勢な遊びを謳歌し、倭人達と共に甘美な
春を楽しむ梯儻は、もはや、時のたつのも忘
れていた。

1964^{P-2/2}

紀292^P 白檀 紀上292^P
新歌った2201
新日 なるてい
梓す 889^P

記(馬)267^P

と、―――遠い祖国をいのんで、日望郷の歌
き切々と歌った。
そして、遙かな大陸へと思いを馳せるのだ
った。

*

家の方から雲が流れくることよ
西のかなたの日に向える会稽の、かつて
太伯の後と称する者達は、
らさうと鳴った。

冠に挿した白檀の葉が、風になびいて、さ
のであろう。

命力あふれる雲木と見なされ、神聖視された
*なお、神前の群山(幣群山)の檀の木は、生

地々そ、白川北岸の合志原であつた。
の地となすにふさわしい台地であつた。

トル

山村
正容 536
1963

瓜ニ一 1961-1/2
美い 1966 2/24 1.965 P

花に嵐

やめとのくに
邪馬台国の女王卑彌子の間近に、正客と
して端座してゐる梯儼は、
のな笑い顔をほころばせていた。

全山咲王誇る桃の花の色をうつしてか、日
御子の頬の色もほんのり染まっていた、
くぶん上気しておいでのようにも伺われた。
もはや、すっかり打ち解けて、仲むつまじ

く、
洛陽の都の素晴らしさについて、梯儼の口を
ついて出てくる言葉の一つ一つが、珠玉のよ
うに輝いていた。

魏国の都と全く同様の、洛陽の都は、
と着々と築かれつつあるのだった。

二人が見入っていたその邪馬台国の都は、
はるか彼方にまで広がっていた。いかにも一
を中心として、次々に取り囲むよう一重。

電
一重切

金堀城
洛陽府
4

「城」
Spil
2150

245
現由すなり
手永(元屋)

1,966^P-1/2

金堀城 洛陽府 ④ 1028^Pの図
2287^P 4^P 新(1)-100

二重・三重・四重・五重の木の柵が、気も遠
くなるばかりに、ただただ連らな

北の方、宮城域の中央部に内裏があつて、
宮殿の屋根の上には千木がそびえ、鯉木が横

向きに幾つも並らへられていた。
また、大極殿門(大明・殿門)、南宮門

(南門・宮門・中門)、朱雀門(宮城門・外
門)が、矢を指し示して聳え立っていた。

宮城域内の西北の隅には、小高い丘
があつて、その丘の上に金堀城の樓觀

(高い建物)がその全容を現わしつあつ
た。

なお、天保期(一八三〇〜四四)以後明治
三年(一八七〇)までの「竹迫手永手鑑」や

検地帳「肥集録」には「城村」とある。(「熊
本県の地名」日本歴史地名大系(44)参照)

かつて、金堀城を模した城があつたそ
の名残りとして、――現在もこの地は、

「城」と呼ばれているのかも知れない。(五
万分一地図参照)

※ もつとも、今その丘の上には小さな神社
おい茂る木々に囲まれた

第13回 邪馬台国の洛陽城

1968 85

1966-3/2

1965 16 映 15

うさ 色や開かあざやがてなる

かあつて、そのような往古のことなど知らぬ
が、たゞをおり成る木々の中にひっそり鎮
まり返ってゐるだけである。
―かし、群山から見はるかす邪馬台国の都
は、―酔いのせいであううか、春霞がか
かつたように、うるみゆくのだった。それは
まるで絵のような美しい眺望であつた。
完成の暁には、―あの繁栄の都、洛陽
城と同じように栄華を誇るころであうう。
あ、この地に現出することになる震ゆしの
都、邪馬台国の洛陽城よ―
そして、あり得べき邪馬台国の都の様が、
あのなつかしい絢爛華やかな洛陽城と重なり
あひ、渾然一体となつて、梯儼の胸の内に想
い描かれるのだった。
梯儼は、眼前に広がる洛陽の都の中に、そ
と我と我が身を置いてみて、感無量の思ひ
に浸りつづけた。シーンと目頭が熱くなるほ
どの懐かしさと、感慨深々と覚えるのだつ

か、梯儼の心をふるわせた。

ひあい 悲哀 切ない せうい 水情を 無情

だ、かゝい、いっと眺め入る梯儔の目は、いつ
 か深い哀しみを湛えていた。梯儔をあたたか
 み慈しんでくれた懐かしき洛陽は、――辛
 さと苦しみに満ちた都でもあった。
 思い出すまいと務めているというの、ど
 うしたにか、締め付けるような切ない悲哀
 が、キリキリと梯儔の心中奥深くから、こみ
 上げてくるのだ。――
 へ私は、邪馬台国を後にして、中国へ帰る
 うと思う。だが、かゝいながら、洛陽の都は決
 して私を受け入れてはくれまい。口上品に寒
 門なく、下品に勢族なし、という有様様の魏
 国。――そのような中国へ帰って、――私は一体
 何をしようというのだらうか（第二十三章）
 へ住みかでの楽しい日々（参照）
 梯儔の目から、――はらはらと零れ落ち
 ていくものがあった。
 へ帰った。――その瞬間、――梯儔は、はっとして我

西む 643

1967^{P-2}/₂

酒之味 加①-190

めか15
目頭 ① 1966-7/2 末 1971
(28)

せいだい

米

香^かり立^たつ味酒^{うまさり}を酌^{しやく}み交^かわして酔^ようほどに、
いよいよ宴^{うたがひ}は盛り上^あっていった。

へ今日は自分^{じぶん}の為^{ため}に、倭人^{わいじん}達がこのように
も盛大^{せいだい}な宴^{えん}を開^{ひら}いてくわいていふというのに、涙^{なみだ}な
じい見^みせては、好意^{こうい}を無^むにする^{こと}になろうそ
梯^{はし}傷^{やう}は心の内^{うち}に苦笑^{くわう}し、悟^{さと}うめないうように
顔^{かお}をそむけ下^{した}頬^ほの露^{つゆ}をそつと指^{ゆび}先^{さき}で払^{はら}った
倭人^{わいじん}達は、梯^{はし}傷^{やう}の心の片隅^{かたすみ}をふぎった一瞬^{いつしん}の
悲^{かな}しみ、なご知^しる筈^{はず}もなく、赤^{あか}い
顔^{かお}をして浮^うかぬ興^{きよう}に、手振^{てふり}り身振^{みふり}りもおも
うおかしく歌^{うた}い踊^{おど}り、笑^{わら}いくずれるのだっ
た。

「小町」 146
 50-48 49
 光栄 1954
 栄光 230
 ほまれ
 560.1.5 → 559.8
 アキ
 1.968
 アキ
 春霞 1828
 この世を
 1966
 1967
 こと
 1870
 こと
 1976

梯僦は、もうすっかり酔いしれていた。
 花吹雪の只中に倭国の女王と共に有るとい
 う現実さえも幻の如く思われてし
 見たこともないほど麗しい夢の野の中を
 ワリワリと彷徨っているかのような、
 心酔の陶酔感を覚えるのだった。
 花は紅に白い、乙女等は舞い歌い、和琴
 の調子は甘く疏れて、私はまるで別世界に居
 るかのような気分です。
 ような気が致します。そして、淡い春霞に
 包まれてゆくこの都城は、まことに絶海の波間に
 浮ぶ龍宮城のようになりません。
 私はずその雅やかな龍宮城へ遊び
 に来て、思い掛けなくも龍宮の女神・乙姫様
 と共に、心算一ひと時を過しているような
 そんな感じがいたします。
 栄誉であります。

海の底 奥津白浪 立田山
 何時か越えなむ妹があたり見む

⑤ 1953^p, 1961^p
くまか(記④) 169^p
紀上 292^p

1969^p

周土記 418^p
記神子(性) 紀上 169^p

911^p ⑤ 1936^p

とある。(第二十八) 章(由津白浪) 山(の) 項において既述

巻一(八三)

* 白浪が山裾に迫る龍神の山(山) 龍田山(山) 龍宮(山)

の南面(南西)に配したこの都は、まさに、龍宮

城と呼ぶにふさわしい夢のような都城であつ

たろうと想像される。

こうして、龍神(山) 山城(山) 風土記(山) 逸文(山) 宇治(山)

橋姫条を見ると、龍神は女性である(と) 梯(山)

偶(山) との二人は、時のたつのも忘れて仲睦まじく

語り合うのだつた。

その二人の姿は、みるからに衆一げで、なん

とも羨ましく思われるばかりのご様子であつ

た。

*

⑤ 1964^p

⑤ 1964^p

白檀

と、そんなとき、髪(山) 華(山) に挿した熊白檀(山) の葉(山)

か(山) らザワザワと音をたてて翻(山) った。

さらに、一粒、二粒、冷(山) いものが(山) 手首(山) や顔(山)

を叩いた。

「おやし

と思つて天を仰ぐと、これは一体どうしたと

いうのだらうか。

先程までのあの輝(山) やか(山) い太陽(山) は失(山) せて

たいき
待機 云 1330
云 1010

てじ (たごし)
手裏 云 1369
1524

1970P
こと

物凄 云
2198

吹きつけた

全天が厚い黒雲に覆われているではないか。
そういえば、あたり一面がすっかり薄暗く
なっている。皮膚寒く、思わすぶるぶる
と震えを覚えるほど。風がヒューヒューと吹き荒んだ。
雨は繁く、激しくなっている。その烈風には花び
らは舞い狂い、もの凄いい勢いで飛んでいった。
花の宴はもはや騒然となり、青ざめ
た女達が、金切り声の悲鳴をあげ、ただ
おろおろするばかりだった。
花見幕をさーかけ
ーかし、男達はさすか逃げて、うやうやなこ
はなく、激しい雨風の中、全身びしょ濡れ、濡れ鼠のよう
になりながら、さっさと日御子のまわりに集つ
てきた。そして人垣を作り、せめて女王も風と雨を防ぎつ
つ、宴席から大木の木陰へと集っていった。
手裏を待つ日御子の髪は、雨を含んで鴉の
濡れ羽色になり、とりと光り、漆黒の
睫からは、雫が滴り落ちた。
降りつづける雨の、降りの雨が、幾つもの流れとなり、
飛沫をあげながら、山の急な斜面を下ってゆく。
まもなく、待機していた手裏がやってきた。

りお子 大かっ、 かんいん 719? 長 710 2000...
龍 14876
小林 95
王 583?

1971

天子の乗る
宝 2025
小林 952?
天子の乗る

導いた ばう い 宮や座敷に招き入れる
清 1093 本人が宮の中へ
居る

男達は懸命に力を振り絞った。
ここに手輿を支えようとして、残る三人の
に流れる奔流の中に頭から突っ込んだ。
は、いめた態勢はどうしようもなく、雫れか
死で踏み止まろうとした。しかし、一度崩れ
男は、つんのめるようになりながら、必
濡れた手輿を持つ四人の男のうち一人が、雨に
と、あ、あ、と、その時、異変が起きた。
静かに動き出し、坂道をゆるりゆると降
の顔にも、や々と安堵の色が戻ってきた。
鳳輦は、横なぐりに吹き付ける風雨の中を
慌てふためき周章狼狽するばかりだった人々
こうして、日御子のことを気遣うあまり、
輿の内へと御案内した。おろされていった。
武内宿禰は、こういって日御子の手をとり
「急ぎ、お乗り願わしゅう存じます」
「急ぎ、お乗り願わしゅう存じます」

さ 著 1673P
え 気力なく、ぐたぐたとなる。

1,972^P-1/2

だか、弾みというものは恐ろしい。坂道を
下って行きつつあった手輿は、大きく傾き、
「ドドド」
と大地をたたいた。
そして、勢い余ったその輿は、もろ
どろうって転倒し、横向きとなり、漸く止ま
った。
足をとられ、水溜りの中に倒れた先程の男
は、為す術もなく、茫然として、足腰
が萎えたかのようにへたり込んだまま、真青
になつて震えていた。
この男の魂は、どこかへ行つてしまったの
だらうか。
泣き喚こうにも言葉にならず、
「ああ、ああ」
という上擦った声か風に乘って流小、虚ろな
目か手輿の方を見詰めていた。
残り三人の男達も同様であつた。輿を急い
で起す気力も失せ、地面に頭を擦りつけ、
身悶するばかりであつた。

転倒
前頁6行

1.972^p-2/2

次頁
から

あつた。俯うつぶせになつてぐったりとした日御子の姿が
横転横した拍子に御簾は飛び散り、奥うちの内に
者があつた。梯てい儼げんであつた。
その時、手奥の方へツカツカと歩み寄つた
お怪お我がはありませぬか。文ぶん々々、私の手は

改行

1973P
1971P 8行
1970P 12行

1973P 12行
1971P 8行
1970P 12行

前頁
血が滲んでいった。
「さあ、お気を確かもって、私の肩に手を廻
して下さい。そうそう。ああ、おいたわしくも、
おみ足まで怪我をなされて、ううだ。
向こうに見えるあの藁葺き小屋で雨宿りする
ことにして、急場のまにあわせながら御手当
をいれてあげましょう。
梯子はそう言いなから、手輿の中から日御
子を助け起さし、軽々と抱えあげ、池のほとり
の藁屋を目指した。
雨と風とがさらに烈しくたたきつけるよう
に襲い来る中を、梯子は、一歩一歩足元を
慎重に確かめながら歩いていった。慎重に
歩くにつれて、梯子の大きな肩に
つかかりと掴ま、日御子の身体が揺れた。そ
して温かい梯子の身体のおくもりが、次第に
日御子に伝わっていった。
もう日御子にとっては、雨も風も、意識の
外に遠のいた一現象にすぎなかった。梯子に

146P
たきつける 1970P 12行
いきつける 1971P 8行

香気
芳

626 P

お年寄致し
前頁より

1974 P

2047 P

つきひと
付人 1481 P

だんかん
抱 1363 甘美 505 P

身を委ねて揺られてゆく日御子は、
ぶわっとした温かいものに包まれて
いるよう
な、そんな甘美な思いにひたっていた。
へこのまま、いつまでも揺られていた。
とさえ、思わなくてしかたがなかった。
*
小屋に著くなり梯儼は、
付人達に指示し
て、木切氷を菓のさせ、火を点けさせた。
焔に照らされ、
な梯儼の顔が、すぐ間近かに浮かび上
がった。
「幸いにして、御怪我のほうは大
事に至っ
ていないようにお見受けさ
します。応急処置
ながら、この薬を塗
っておくことに
しまし
よう。」
梯儼は傷口に酒を振り掛けて清めた後、
から取り出した薬入れの蓋を開けた。
すると、何ともいえない芳ば
い香りがあ
たりに満ちた。その小は、た
とえようもない
でも、行方不明のよう
な、厳肅な雰囲気
を漂わせるに充分な香気であ
った。
梯儼は、その薬を薬指で一撫
でして掬うと

151 元
1693⁷

身仁善計了 元 1482'

1,975^P

元 2048'

けた。
そつと、血^ちが^い滲^{しみ}み出る^であたり^に塗^ぬり付^つ

梯子は、身に着けている衣を細長く引き裂き

い て、一日御子の白い腕の切り傷を縛った。
 そーてすぐに引き続きの足の手当てにと

りかか
さうはく
蒼白
たつた
た
日御子の顔はせ
ひのみこ
驚くほど
かんの
てぎね
手際
の
良さだ
ようや
漸く
ち
血の
気け

[illegible]

て
いた。

②

日御子は、いと
梯儼の手の動きに見入っ

日 (いつ)	7
の	さ
う	ハ
ち	
に	こ
は (あ)	れ
痛 (いた)	で
み	大 (だい)
も	丈 (じょう)
傷 (きず)	夫 (ふう)
も	で
ハ	こ
す	ざ
ッ	い
か	ま
り	す
癒 (い)	。
え	こ
て	こ
し	数 (すう)

まうとでいしように
ひのみこ
日御子のほつそり
た足首に
梯子の熱い

息が白い煙りのような霧となつてかかつた。

7 梯儼様に喜ひ頂きたものと思ひ設け

ま	し	た	の	花	の	宴	は	突	然	の	花	の	嵐	の	た	め	に	
こ	の	よ	う	に	す	か	り	台	無	し	に	な	っ	て	し	ま	い	ま

した。
そのうえ、
斯様にまでも
梯鳥様のお手

560.1.7 西
西 1953 19 宛のほとりの花

けさ 10/10 P

1977 P
あはれ 足早 35 P
切ない 251

改訂
二人は 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

かめと口をひらいた。
二人は、暫し無言のまま戸口に佇み、池
の岸辺に打ち上げられ、花の紅の帯を
まま守り通すなけねばならないという毅然
たる宿命が、あつた。
こうして自らの立場によって縛られた二人
は、いよいよ深き立つばかりの熱い想いを胸の内
に押え込んで、言葉少なに、優しく見詰め合
うことだけが出来なかつた。
嬉しくも切ない時が、足早に過ぎていった。
やがて、乾いた衣服が、替りの手裏も
やつてきた。いまや二人は、別々に、屋形裏
内の人とならなけねばならなかつた。
春の嵐はまだ当分収まりそうもなく、敷
け風と飛沫雨が木々を揺さぶりながら流れてい
く。二人は、暫し無言のまま戸口に佇み、池
の岸辺に打ち上げられ、花の紅の帯を
まま守り通すなけねばならないという毅然
たる宿命が、あつた。
こうして自らの立場によって縛られた二人
は、いよいよ深き立つばかりの熱い想いを胸の内
に押え込んで、言葉少なに、優しく見詰め合
うことだけが出来なかつた。
嬉しくも切ない時が、足早に過ぎていった。
やがて、乾いた衣服が、替りの手裏も
やつてきた。いまや二人は、別々に、屋形裏
内の人とならなけねばならなかつた。
春の嵐はまだ当分収まりそうもなく、敷
け風と飛沫雨が木々を揺さぶりながら流れてい
く。

H15, 10, 13
H30 (2018) 5.16 ~ 5.18 (4回)
H31 (2019) 1.15 (2回) ~ 1.16 (3回)
令和元(2019) 6.21 (1回) ~ 6.22 (3回)
令和2年(2020) 1.28 ~ 1.30 (3回)

117
抱く
えき
かき

1,978
P
木々
前16年

2638
国許
生れた土地

とは

心なつかしく名残りは尽きません
供の者達をこの冷え切った雨の中
までも待たせておくわけにも参りませぬ故、
これにてお別れいたします。今日の御恩、私
決して決して忘れません。
本当に有難うございました。もうこの後
お逢いする機会はないかも知れませんが、
どうかお身体にだけは気を付けて、貴方様の国
許へは無事お帰り願わしゅう存じます。それ
では、梯鳥様、
降り頻る雨は徳田様の葉を叩き、吹き募る
風はひゅうひゅうと鳴って、日御子の言葉を
奪い去った。
「卑彌呼殿、
梯鳥の声も、虚しく空に掻き消えていった。
こうして二つの輿は、それぞれに悲しみを
抱いた人を乗せ、
別々の道をたどる。
帰っていった。
米

下1/30
1/29